# 遺跡と共存する植物園

清水芳裕 Shimizu Yoshihiro

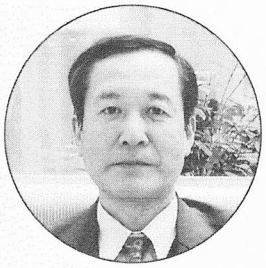
**気づいていただろうか？　多くの植物園には遺跡があることに。**
**大学植物園でも古い歴史をもつところには重要な遺跡が残っている。**
**思いがけない組み合わせに「なぜ？」と思う人も多いはず。**
**その背景を立地環境や遺跡の特徴に探ってみよう。**
**そこには自然とともに生きてきた私たち人類の本来の姿が見えてくるだろう。**

## 植物園の立地と遺跡の形成

植物園は生きた植物標本を研究や教育に提供し、またその啓蒙の場としての目的をもっており、そのため、植生にかかわる自然環境を長い年月にわたって保全することへの配慮が求められる。こうした、土地に密接に結びついた植物園の存在によって、遺跡が荒廃することなく保存されているという事例も少なくない。ここでは、古くから著名な遺跡が残されている大学植物園をとりあげて、その立地の特徴や遺跡の形成過程に注目しながら、両者が共存している背景を探ってみることにする。

比較的広い面積をもち、植物の生育に必要な地形や土壌に大きな変化をおよぼさないことを重視するなど、植物園の管理には個有の要素がいくつかある。したがって、広い範囲にわたる土地が人為的な改変を受けにくいという条件をそなえ、それが長い歴史を刻んだ遺跡の保存に、大きく作用したことは確かである。

一方、両者の歴史を逆において、遺跡の形成された場所に多くの植物園が立地している、という関係をみておくことも必要である。大学植物園の設置場所については、当時の土地利用の社会的な背景が関与しているものの、植物の生育に求められる自然環境と、遺跡を残した先史・古代の人類の活動舞台におけるそれとの間には、類似した条件がともなっている。今日では、とくに都市生活においては、自然に依存して生活しているという感覚は希薄になっているが、人類は自然と深いかかわりをもち、それを巧みに利用しながら生存し続けた歴史をもっている。とくに先史時代には、動・植物の生態系に依拠する面が強かったことを、遺跡の立地やそこに残された道具や動・植物の遺存体などから知ることができる。



しみず　よしひろ　一九四八年生まれ。京都大学文学研究科助教授。文学博士。埋蔵文化財研究センターで構内の遺跡調査を行う一方、古代の窯業技術に関する研究を進めている。おもな著作に『縄文土器大成』（共著、講談社）、「須恵器の焼結と海成粘土」（『国立歴史民俗博物館研究報告一九九八年』）など。

現在の植物園と過去の遺跡の立地とは、本来性質の異なるものであるかのようにみえるが、両者にはある共通した要素が認められ、そこに、植物園の存在が遺跡の保存を可能にさせたことの前提がある。

このような視点から、比較的古い歴史をもつ植物園として知られ、かつ著名な遺跡を残している、京都大学、北海道大学、東京大学の例をとりあげて、その共存関係をみることにする。また自然の地形や生態系を巧みに取り入れて築かれた仙台城では、一部の自然林が城郭の重要な要素であったがために、今日まで開発の手がおよばず保全され、こうした希有な条件をもつ東北大学の植物園について紹介してみることにする。

## 遺跡と大学植物園の共存

### 京都大学植物園

京都盆地の北東部の京都大学吉田キャンパスには、古くから著名な縄文時代から弥生時代の北白川追分町遺跡がある。その当時は、比叡山西麓の森林、そこから幾筋にも分かれて形成された扇状地、およびその前面に広がる河川によって作られた低湿地など、多様な環境が展開した地域であった。先史時代の遺跡の形成は、こうした地形とその変化に対応した自然環境、およびそれらが影響を与えた動・植物相などの生態系に大きく依存していたことが明らかになっている。

これまでの発掘調査で、縄文時代では炉をともなう住居跡、土器棺や配石で作られた墓地、扇状地末端の斜面下には、食料となるトチやドングリのような堅果類を集積した貯蔵穴など、集落を構成する遺構群が多数発見された。また扇状地をとりまく低湿地部には、当時の環境をものがたる多くの資料が残されていた。水づかりの状態で保存された多数の樹木や木の葉や根などからは、堅果類を豊富に供給する一帯であったことがわかり、泥質土に残された人や動物の足跡は、森に囲まれた沼沢地でのそれらの活動の痕跡を明瞭に示すものであった。[*1] さらにこの低湿地は、弥生時代には水田として利用

写真1（上）　発掘された縄文時代の配石墓と甕棺墓（京都大学植物園）　写真2（下）　移築保存した写真1の遺構の説明板（京都大学植物園）

*1　京都大学埋蔵文化財研究センター　一九八五『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』。

されたことが、土壌の花粉分析の結果などから明らかになっている。

京都大学の植物園は、この北白川追分町遺跡のほぼ中央にある。面積一万六五〇〇平方メートルのなかに、中国から最初にもちこまれたメタセコイヤをはじめ、多種類の樹木がうっそうと茂り、市街地のなかの大学にあって、この一画は自然豊かな環境を醸し出している。一九二三（大正一二）年四月に開園し、植物学、動物生態学など広い分野の研究に利用されてきた。

前述した北白川追分町遺跡群の集落の一画を占める墓地は、この植物園のなかで発見された遺構である。[*2] そこでは縄文時代後期の土器棺墓、配石墓の遺構が密集して出土し、住居跡が残されている住空間を中心にして、扇状地末端の低湿地や周辺の食料採取の空間とともに、集落を構成する主要な要素となっていた（写真1）。これらは西日本の縄文時代の遺跡ではきわめてまれで、学術的価値の高いことから、近接した地上に移築して、観察できる状態になっている（写真2）。これらの遺構は、園内の広い範囲に連続している可能性が高く、植物園の現状に大きな変化がないかぎり、良好な状態で保存されていくことが期待できる。

## 北海道大学植物園

北海道大学植物園は、札幌駅からほど近い、現在の北海道庁や旧道庁舎などに隣接した市街地のなかにある。約一三・三ヘクタールの面積で、農学部附属植物園としての長い歴史があり、現在は北方生物圏フィールド科学センター植物園という名称となっている。札幌農学校のクラーク博士の進言を契機として、一八八六年に開園され、農学校第一農場の南端部を占める場所であった。[*3] 現在では温室、高山植物園、草本園、灌木園などが整備され、栽培・展示がされている。

この一帯は、石狩川の支流である豊平川によって形成された低い扇状地の上にあり、地形の名残は今日の園内各所に見られるゆるやかな起伏にも反映している。扇状地の周辺に特有な地下水による湧水の場所は池として残っている。

広大な敷地を占める北海道大学の構内と植物園一帯は、これまでの調査によると、続縄文時代の後半から擦文時代、つまり、紀元後四世紀ごろから一〇世紀代にわたる年代の遺跡が存在することが明らかになっている（図1）。一九五二年に北海道大学北方文化研究室が行った発掘調査で、八三基の竪穴住居跡が確認され、それ以後この一帯の遺跡は「北大遺

図1　北海道大学の遺跡保存庭園（写真3）と竪穴住居跡（写真4）の位置
（注）国土地理院発行二万五〇〇〇分の一地形図「札幌」を一部改変。

*2　中村徹也　一九七四『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』。

*3　北海道大学　一九八〇『北大百年史』部局史、九八〇—九八五頁。

跡」とよばれている。[*4]

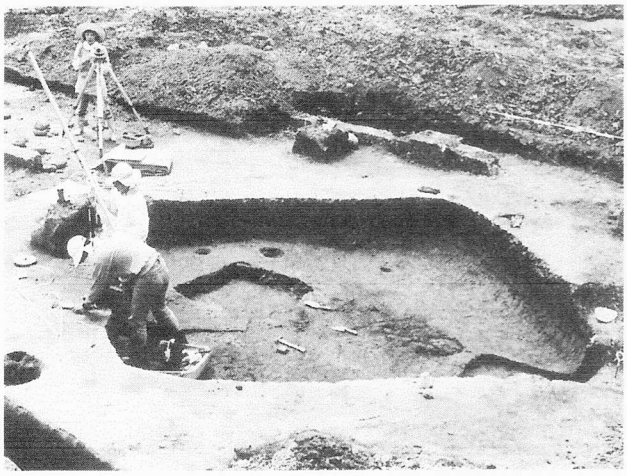
続縄文とは本州で弥生・古墳文化が盛行したころに、北海道ではなお縄文文化の伝統が残る時代として命名された。この時代の後期の土器型式を北大式とよぶが、それは北海道大学構内で出土した一群の土器を指標としたものである。[*5] その後の本州の古代に相当する時代を、刷毛目文の装飾をもつ土器を特徴にして擦文時代という。

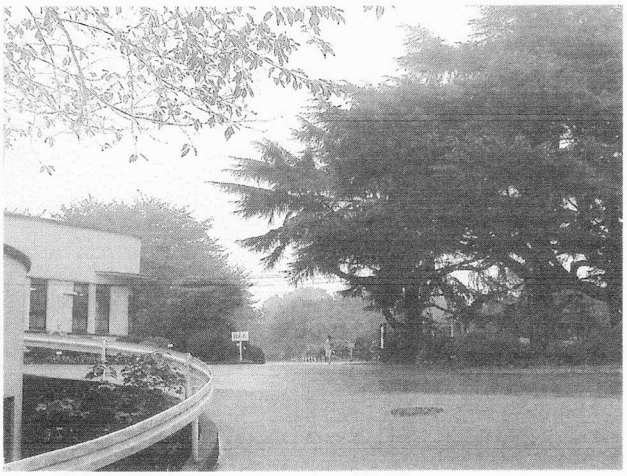
現在でもこの時代の竪穴住居跡が地表面に窪みとして確認できるものもあり、北大構内北部の陸上競技場および野球場に隣接する一帯は、遊歩道や説明板を設置して「遺跡保存庭園」として整備されている（写真3）。このような遺跡は大規模な範囲に群をなしていたことが明らかになっており、南の植物園にもおよんでいる。

一九八二年の温室建て替え工事のさいに、植物園の東南部を北海道大学埋蔵文化財調査室が発掘調査を行い、擦文時代の竪穴住居跡を検出している。[*6] 三・九×四メートルのほぼ方形で、検出面から約五〇センチの深さをもち、南東の一辺にくり抜きの煙道をともなうカマドを備えている（写真4）。温室は旧地形の河川の湧水点である池に接した微高地上にあり、同様の池や湿地は園内各所に見られ、このような住居をともなった集落跡が、当時の自然環境とともによく保存されていることを示している。

## 東京大学植物園

小石川植物園という名称、あるいは青木昆陽が甘藷を試作した場所として一般にはよく知られている。のちの徳川五代将軍となる綱吉の別邸が設けられた場所で、その地にあった白山（はくさん）神社にちなんで白山御殿とよばれ、現在の白山三丁目と





上から　写真3　遺跡保存庭園の景観と説明板（北海道大学構内）　写真4　植物園内の竪穴住居跡（北海道大学埋蔵文化財調査室提供）　写真5　東京大学植物園西側の傾斜面　写真6　縄文時代の住居跡の位置（東京大学植物園、写真の中央右端付近）

＊4　北大調査団　一九五五「北大遺跡について」『北方文化研究報告』第一〇輯、一―二六頁。

＊5　河野広道　一九五九「北海道の土器」『郷土の科学』二三、二七―四二頁。

＊6　工藤義衛・松岡達郎　一九八四「農学部附属植物園地区の調査」『北大構内の遺跡　昭和五七年度』二二―二五頁。